



エコ回収のはじめて物語

詫間中学校では、月末に家庭で出た空き缶や牛乳パックを集めています。いっぱいになったらそれを換金し、様々な活動の補助金にしています。この取り組みは、いつ、どのような経緯で始まったのでしょうか？もとをたどっていくと、次のような新聞記事に行き当りました。

1988. 2. 14

四

國

棄斤

闇

級友、地区民へと協力の輪が広がつてゐた。生徒会でも昨年十月、全校生に周知、P.T.A.にも協力を呼びかけ、学校、地区ぐるみの募金活動をスタートさせ、本年度末を目指し募金活動を続けていた。当初、電動いすを寄贈する予定だったが、贈り先の要望を取り入れ、使い勝手のいい普通の車いすに。約八百石を収集、七万五千円余が集まつた。車いすには、託児中学校寄贈「No.1」「No.2」と通し番号が書かれ、同校では今後も賛同者に協力を呼びかけ、活動を続けていくことにしている。

女生徒の呼びかけに

許 間 中

アルミ缶収集で
車いす2台購入

あす町社会福祉協へ贈る

『協力の輪』が広がる

この記事によると、当時中学生だった片岡さんが、ラジオ番組の呼びかけに共感して一人で始めた活動だったようですね。その活動が、家族、クラスメート、地域に広がり、生徒会からも全校生徒やPTAに広がっていきました。そして1年後、集まった空き缶を換金して2台の車いすを購入し、社会福祉協議会に贈りました。これが詫間中学校で現在も続いている、エコ回収の始まりだったようです。

この新聞記事の翌日に行われた贈呈式の様子が、別の新聞で紹介されています。体育館で行われた贈呈式には、当時の詫間町社会福祉協議会の曾根会長が出席され、運動を始めた片岡さんと生徒会代表の2人から2台の車いすが渡されました。「僕たちはアリみたいな存在。でも、アリもたくさん集まれば大きな力になることを知りました。」という当時の武内生徒会長の言葉に、曾根会長は「本当にありがとうございます。皆さんの善意でたくさんのお年寄りが助かります。アルミ号と名付けて大事にします」と感謝状を手渡した、とその記事には書かれています。

一人が始めた優しい小さな取り組みが、徐々に周囲に広がり、やがて学校だけでなく地域ぐるみの取り組みとなり、それが現在も続いているのですね。面倒なことはさけようとしたりする最近の風潮から見れば、当時の生徒会長が自分たちを「アリ」にたとえているのに中学生らしい純真さや潔さがうかがえます。この記事が書かれた 1988 年から数えて、今年は38年目にあたります。残念ながらコロナを機に車いすの贈呈はやまっていますが誂中生の DNA は受け継がれ、伝統となり現在も「エコ回収」として活動が続いています。